

令和3年度 宮崎県立高城高等学校との連携事業報告

－「課題研究」ナタ・サポの取組み－

宮内 孝
園田 博一
早川 純子
藤本 朋美

平成29年3月28日(火)南九州大学と宮崎県立高城高等学校による連携協定を締結した。「相互の資源および機能を活かし、教育・研究及び地域社会の発展に資すること」が本協定の締結の目的である。連携事項は、「1.教育の充実・発展に関すること」「2.学術研究の充実・発展に関すること」「3.地域社会の発展に関すること」「4.その他、双方が必要と認める事項」であった。

そこで、人間発達学部子ども教育学科は、この協定に基づいて高城高等学校の生徒が取り組む課題研究、特に保育分野の学習支援「ナタ・サポ」に取り組んだ。「ナタ」とは、南九州大学を南大と呼び、「サポ」とはサポートを意味する。この「ナタ・サポ」は、本年度で5年目の取組みである。

本年度は、本学科教員が下記の2つの内容についてサポートした。

1. 保育分野に必要な表現系の知識や技術の習得を目指した学習支援
2. 「ちびっこ運動会」の企画・運営のための学習支援

本稿では、このサポートの概要について報告する。

1. 保育分野に必要な表現系の知識や技術の習得を目指したサポート

保育分野において必要な、表現リズム、造形、言語表現の知識や技術習得を意図とした学習支援である。具体的には、下記の目的が高校から示された。

- 衣食住・保育等のスペシャリスト育成のため、学習の高度化を図った学習に取り組む。具体的には、保育検定の分野にもなっている表現リズム、造形、言語表現などに関する実技指導の充実を図る。

- 大学と連携をした授業を展開することで、より専門性の高い学習へ興味関心がわき、将来、大学に進学し、地域貢献できる人材育成に繋げる。

このような目標達成に向けて、本学科教員が下記の講義を行った。

- (1) 造形担当：園田 博一

◇日時：

令和3年6月25日(金) 13時00分～14時45分

◇対象：生活文化科3年生：6名

◇場所：宮崎県立高城高等学校

講座内容：◇講義と実践演習。

幼児教育に関心のある6名の生徒が受講。幼児教育の造形表現について講じた。幼児教育の5領域における表現の位置づけ、表現の氷山モデルを使い、その構造を解説した。

五領域（健康・人間関係・環境・言語・表現）についての簡潔な解説を行った。また、具体的な児童画を使って発達の段階的発達の様子を解説した。

演習では初めに色水を使った色彩の変化を見せ、生徒の興味関心を引き付ける取り組みをした。次に表現の基本的なデッサンについて解説した。鉛筆を使ったグラデーションを制作し、立方体や球の表現に挑戦した。鉛筆デッサンで使用する明暗の考え方や使い方の捉え方は、作例を基に説明した。

最後に紙コップを使った立体工作に挑戦した。紙コップにはさみを使って切れ込みを入れ、巻き上げたり、ひねったりして立体化し、合体させ花を表現した作品に仕立てた。

小人数ではあったが、生徒の皆さんの真剣さが伝わった講座だった。



対策を行った。2級以上には楽典（音楽理論）に関する筆記試験が課されるが、その内容はかなり高度だ。音符や休符、拍子やリズム、楽語はもちろん、コードの構成につながる音程、調、和声の問題が含まれる。なかには、本学のような大学養成校で扱う内容を超えるような水準の問題も見られる。

ピアノ実技については、1級の場合ピアノソロに加え弾き歌いも課される。ピアノソロは、級位に応じてバイエルと弾き歌い歌唱曲から数曲ずつが予め提示され、検定試験の約1週間前に試験曲となる1曲がそれぞれ指定される。弾き歌いの歌唱曲には、保育現場での実践的な活用を意図した様々な伴奏型（簡易編曲版）が存在するが、試験対象となるのは原曲版である。歌を歌いながら原曲を忠実に再現するためには熟達した技術が必要だ。

生徒たちは、保育検定に関わる他領域の学習、および学業全般と両立させながら、上位級取得という目標を掲げて、文字通り寸暇を惜しんで努力を重ねている。

(2) 表現リズム担当：早川 純子

◇日時：

- ① 令和3年6月4日(金) 13時15分～14時55分
- ② 令和3年6月18日(金) 13時15分～14時55分
- ③ 令和3年7月9日(金) 13時30分～15時00分
- ④ 令和3年7月27日(金) 13時30分～15時15分
- ⑤ 令和3年9月14日(火) 15時15分～16時45分
- ⑥ 令和3年10月8日(金) 15時15分～16時45分
- ⑦ 令和3年11月19日(金) 15時15分～16時45分
- ⑧ 令和3年12月23日(金) 13時30分～16時10分

◇対象：2年生・3年生（保育検定受験者）

◇場所：高城高等学校（家庭科実習室）

◇講座内容

新型コロナ感染拡大防止のために実施回数を減らした昨年度に比べると、やはりコロナにより何度か日程変更を余儀なくされながらも音楽の授業については例年並みの回数を実施できた。

担当した「表現リズム」分野では、保育検定の主として1級や2級を受験する生徒を対象に、筆記試験対策および弾き歌いを含むピアノ実技試験

(3) 言語担当：藤本 朋美

◇日時：

第1回 令和3年6月11日(金)

第2回 令和3年7月2日(金)

いずれも13時25分～14時55分

◇対象：3年生

◇場所：宮崎県立高城高等学校

◇講座内容：第1回 言葉を育てる遊び

<ねらい>

① 保育・幼児教育においてなぜ「絵本」が重要とされるのか、その意味について考える。

② 「言葉を育てる遊び」にはどのような遊びがあるのか、その種類を知る。（児童文化財：絵本、紙芝居、お話、わらべうた、言葉遊び等）

第2回 絵本を通して子どもの育ちを学ぶ

<ねらい>

① 「絵本」を通して子どもたちに何が育つのかを考える。

② 絵本の読み聞かせを行い、その留意点を知る。



講座は、実際に絵本に触れながら演習形式で行った。『ぐりとぐら』のように長年読み継がれている絵本をはじめ20冊程度の絵本を持参した。絵本を並べていると講座開始前から手に取り、幼いころに読んだ体験を語り合う様子が見られた。

第1回は、絵本の意義のほか、児童文化財についても触れ、童話のタイトルだけを示し、あらすじを30秒で相手に伝える活動を行った。覚えているつもりでも別の童話と内容を混同していたり、結末がわからなかったりして、記憶の曖昧さがその場を盛り上げることとなった。

第2回は、絵本に描かれた子どもたちの姿を発達過程からみる活動を行った。絵本には子どもたちの様々な姿—例えば、友達を求める、うそをつく、泣くなど—が描かれていることを共に確認した。

絵本やお話は、物語とともにその時間を共に過ごした身近な大人や友達の記憶も呼び起こす。そうしたことを実際に体験しながら、絵本の魅力や絵本が子どもたちに与える影響について考える時間を今後も計画していきたい。

◇「企業・郷土探究」講習会

◇日時：

令和3年7月14日(水) 14時15分～15時30分

◇対象：1年生40名

◇場所：南九州大学

◇講座内容：言葉を育てる

「企業・郷土探究」の一環として、高校1年生に向けて講演を行った。「伝え合い」において言葉がどのような力をもっているのかについて考えることをねらいとし、言葉に関するワークショップを行った。ワークショップを通して、次に示す

言葉の力を体感してほしいと考えた。

① 人は言葉によって世界の見え方、捉え方を変えることができる。

② 語彙が増えると世界を見る目が詳しくなる。

高校生自身が、「言葉」や、言葉を用いた「伝え合い」について考え、自らの言葉を振り返る時間になっていれればと願う。

2.「ちびっこ運動会」の企画・運営のためのサポート

担当：宮内 孝

「ちびっこ運動会」とは、生活情報科2年生の生徒が高城幼稚園児を招待して実施する運動会のことである。

この運動会の企画・準備そして当日の運営を行う体験を通して、今までの学びを活用させる。さらに、実際に幼児にふれる体験を通して、幼児理解を深めたり、新たな学びを獲得させたりして、今後の学習への動機付けを図ることを目的としている。

(1)「ちびっこ運動会」開催に向けてのワークショップ

◇日時：

令和3年6月21日(月) 13時15分～14時00分

◇場所：宮崎県立高城高等学校

◇講座内容

幼児の発達段階を踏まえた運動会種目の内容や子どもへの指示・説明の仕方などについて実技を交えて行った。運動会種目については、年長児にとって、簡単でしかも勝敗が明確にわかる運動遊びを紹介した。

また、高校生を幼児と見立てて実技をするなかで、子どもへの指示・説明のあり方について指導した。

(2)「ちびっこ運動会」参観

◇日時：

令和3年11月18日(木) 10時00分～11時30分

◇場所：宮崎県立高城高等学校

「ちびっこ運動会」に参加して、運動種目の内

容や高校生の指示・説明の仕方、そして子どもへのかかわり方の様子を観察した。

(3) 「ちびっ子運動会」活動のまとめ

◇日時：

令和3年11月29日(月) 8時40分～9時25分

◇場所：宮崎県立高城高等学校

◇講座内容

「ちびっ子運動会」の振り返りとして、幼児期に習得させたい3つの「基本的な動き」と「運動の楽しさ」を視点として、運動会で取り上げた種目内容のよさについて解説した。また、「効率的なマネジメント」の視点で、準備・進行・説明・指示や子どもへのかかわり方のよさについて解説した。

このような生徒が行った計画・運営等のよさを肯定しそして意味づけをすることで、生徒の達成感を高めたり、自己肯定感を高めたりする契機となったようである。

3. 「ナタ・サポ」を振り返って

この取組みをスタートして、5年が経過した。この5年間の取組みによって、円滑に本事業が運営できるようになった。

生徒にとっては、専門家による指導が受けられることもあって、当該生徒たちは本事業を肯定的に受け入れているようである。今後は、5年間の取組みの成果を省察して、本事業の充実を図るとともに、新たな分野での連携事業にも取り組みたい。